古典劇に見る破戒僧への疑問

小林　勝

異論もあるが私は伎楽から日本語劇史を始めることにしている。伎楽は百済から渡ってきたもので、正倉院に現存する仮面を見ると、西域地方に淵源し、中国・朝鮮を通って日本に渡来したものであることがわかる。

聖徳太子がこれを喜ばれ、大和の桜井の里に伝習所を作って幼童に習わしたという記録がある。東大寺や全国の国分寺などに於ける仏会の荘厳として用いられたが、その形式は一種の行道で、その異相面のエキゾチシズムが一般参詣者の興味をひいたのであろう。

しかしわざわざ伝習せしめたということから考えると、その行道に多才の技術的な要素があったのかも知れない。仏会の荘厳としての行道は、今日でも菩薩や稚児を用いるものが各地方に残っているが、これらには特別の技術があるとは思えない。

しかし伎楽はまもなく亡びてしまった。

舞楽人狛近真が児孫のために書き遺した「教訓抄」の中に伎楽のことが書きとめてある（日本古典全集2冊のうちたった2頁である）。

それによると、行道に多少のシグサを伴なう所もあるが、性的な悪フザケもあって、それが伎楽を亡ぼしたのかも知れない。もちろん聖徳太子がそんな下品なものを喜ばれるわけはないから、後になって俗楽的なものに堕落したのであろう。

その次に渡来したのは唐の舞楽で、これは歌舞管絃として形式的にも完成されたものだが、朝廷や大きな寺社に儀式用に保護され、日本古来の歌舞音曲も吸収して、今日にまで伝わっている雅楽がそれである。内容はあまりに典雅に完成されているから、抽象的でその意味のわからぬものが多く、わずかに越南地方（ベトナム）から来た林邑八楽にやや演劇的なものが見られるだけである。

問題はその次に来た散楽である。いわゆる俗楽で、庶民の中から起った雑芸である。中国古来のものもあり、西域地方からの伝来ものもあって、散楽百戯と言われたものだが、日本に来て日本の民間芸能も加わったであろう。やがてこれが猿楽と田楽の二つになるが、雑芸であることに変りはない。

田楽のことはしばらくおき、散楽がどうして猿楽になったかについては、私はまだ釈然としていない。どの演劇史を読んでも、まだ私を説得してくれてはいない。

一条天皇の時代の藤原明衡の「新猿楽記」によると、猿楽はだいたい曲芸と奇術と物真似（劇の原始形）の三つに分けられる。そのうち物真似に帰するものを猿楽能

と言った（もちろん田楽の方にも田楽能がある）。

その中で特に注意したいのは「福広聖の袈裟求め」と「妙高尼のムツキ乞い」である。前者の解釈には二説あって、高位の僧正が美しい袈裟の寄進をねだるという説と、遊里に行って明るくならぬうちに帰ろうとして自分の袈裟を暗がりで捜し、あわてふためくという説である。寄進の方ならまずまず許せるが、女犯の方ならとんでもない破戒行為である。そしてもう一つのとりすました尼の場合はそれ以上の破廉恥であって、このころからすでに高位の比丘比丘尼の性乱行が風刺として指摘されていたことに、私はむしろ絶大なショックを覚える。権威の失墜というベルグソン喜劇説の典型例だが、喜劇であるからと言ってただ笑ってばかりでは居られない恐怖をさえ感じるのである。

私はここ数年来、毎年二回くらいの割合で仏跡めぐりを試みているが、どんな寺にも必らず妻女がいる。浄土真宗ならそれはわかる。宗祖親鸞が非僧非俗を主張した宗派だからだ。それが最も戒律のきびしかるべき禅宗にまでその風が及んで来ては、もはや日本の仏教は出家仏教ではなくなった。全くの在家仏教である。東洋の小乗仏教国から来た僧侶が、日本へ来て一番驚くのはそのことだという。

仏教が東漸するに従って、その国の風土に風化されることは仕方がないとしても、煩悩即菩提という仏教哲学の究極は、般若の知恵（空観）を以って清浄でなければならないわけであるが、真言密教の理趣経も、読み誤ると立川流となって、既に徳川時代に断罪されている。真言密教はいうまでもなく強法大師の伝えられたものだ。

現在では、真の出家は十人くらいいるかどうかと言われている。先年も某派の管長（尊敬に価する高徳の老師であるが）の次男とかが市会議員か何かに立候補したというので、何か裏切られた感がしたものだ。日本人ほど宗教不信の多い国は、世界でもほかにないという。宗教者（仏教人）自身がすでに宗教不信に陥っていては、何ともはや、これを救う道はないかも知れない。その関係は、政治と政治不信ともつながる心理が、そこに見えてくるようだ。

昔の人は猿楽の高位の比丘比丘尼の失墜を見て、或はゲラゲラと笑ったかも知れない。笑える人はまだ自己を持っていられたからだ。私には笑えない。私もはや自己を持てない時代に押し込められている。

猿楽がどこで演ぜられたかについては、藤原明衡も明記していないが、恐らく寺院などで公開されたのではないかと思われるフシがある。現在京都の壬生寺で毎年演ぜられている壬生狂言（これも古典劇と見ていいだろう）に、やはり破戒僧を槍玉に上げたものが残っている。見物はただそれを見て笑っている。寺の坊主も笑って見ている。どういう心境なのだろうか。ただこの壬生狂言の救いは、寺に入りこんだ女が、あわてて仮面を逆にかぶって壇家に女犯を見つけられるという、仮面劇でなくては表現出来ない独創的な演出の機智があることで、これは演劇としての救いであって、仏教のそれではないことは言うまでもない。

仏教はもっと日本人にとって珍重していい思想だと思うのだが——。